

熊本市神水の本田タネさん(87)が『戦争裁判』をこのほど自費出版した。55年前にB級戦犯としての刑死した夫の戦争裁判への疑問を追及した書だ。小説家の宮本誠一さん(41)に、同書を読んで著者と語らった感想を寄せてもらった。

別れ際、「私の歩んだ道の一点が浮き上がっては、しるべ」とつづけて字でしたためられた小箱から彼女が「とおしむように取りだし、たものは、看護婦合格証、日中戦争での従軍看護への金券、国立病院採用辞令、さつに数枚の陸軍病院時代の写真などだった。それはまことに戦中から戦

後の混乱とは対照的に、色白いふつくらした顔立ちに気丈なまなざしをひらきつつ、どこか少女のあどけなさを残している。そんな静かなモノクロの世界にたたずむ一人の女性に、その後昭和、平成にかけ長いたたかいが待っていたようとは誰が想像できただろう。「どうして、こげん強うなつたつでしようね。昔はやさしか性格だったのに」

「戦争裁判」の著者 本田タネさんと会う

宮本誠一

じつと、人間の真の「やさしさ」とはなにかを考へさせられる思いがした。前著にはタネさんの夫、始さんとの結婚生活や始さんが戦犯容疑となり、刑に処せられるまでの様子が自伝ふうで書かれている。県内外から多くの反響があったが、中には心ない声もあった。

「どうして、こげん強うなつたつでしようね。昔はやさしか性格だったのに」
「そう屈託なく笑みをこぼす表情からは、『戦犯』の妻として生きてきた苦悩と重みをすくなくみこる」とはむずかしい。だが、終始一貫した過去の日づけや記憶の正確さに、半世紀以上の出来事がいっつのまにか「現在」と逆転し、ある歴史



◇みやもと・せいいち 1961年荒尾市生まれ。小学校教師をへて95年から一の宮町で小規模作業所「夢屋」を営む。小説「真夜中の列車」「水色の壁」で部落解放文学賞、「ウォール(一壁)」で県民文芸賞小説部門一席を受賞。阿蘇町在住。

真実を求める人間の姿 歴史の欺瞞解き明かす



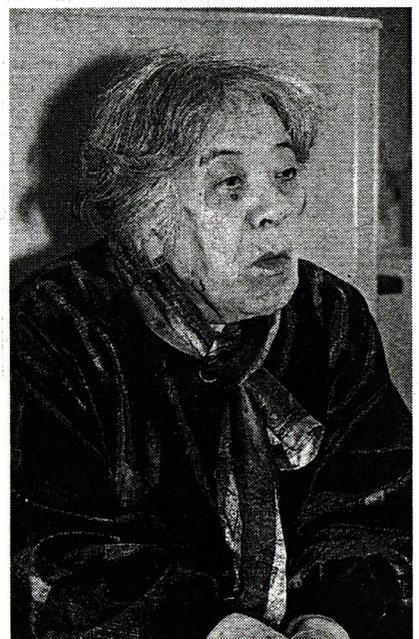
「戦争裁判」の表紙

「戦犯になったのは、悪いことをしたけんしょうがなかでしよう」。あるいは名も告げず電話口で「ご主人は何人殺しなはったとですか。一人ぐらいいじゃ死刑にならんですけん」。そう吐きすてるように言った人もいたという。また周囲の

「戦犯になったのは、悪いことをしたけんしょうがなかでしよう」。あるいは名も告げず電話口で「ご主人は何人殺しなはったとですか。一人ぐらいいじゃ死刑にならんですけん」。そう吐きすてるように言った人もいたという。また周囲の

なぜか。検事側の証人に当時の收容所長がおり、夫の上司であった班長が被告側証人としての出廷を辞退したことも不可解だった。

戦後生まれの人に配って、そのあまりの無関心さに驚くことも多かった。それらいくつかにことごとき動かされ、再びペンをとった。それが今回の『戦争裁判』である。連合軍は終戦と同時に「戦犯調査局」なるものを



◇ほんだ・たね 1916年熊本市生まれ。看護婦として戦前は熊本陸軍病院健康臨時分院など、戦後は国立熊本病院に勤務。著書に「B級戦犯の妻ふたすじの道」がある。

そのことはタネさんが私に直接に語ったのだが、班長が亡くなっていることもあって、本書にはその詳細は書かれていない。いよいよ真実は手のとどくところへきた。起訴のもととなる告訴は、いったい誰の名でなされたか。タネさんは八十路を半ばすぎた

今、この著を記したばかりか、元所長の真偽を明かそうと意欲をもちしている。これまで戦争は観念でとらえられ、一般論で語られがちだった。だがここにあらはるのは肌身で感じた疑問をひたひたびつた尊厳をとり

もどすことが、どんなに困難で苦しみにみちた道のりか。歴史の欺瞞(ぎまん)へ垂直にふり下ろされた文字から、ひしひしと伝わっているのだ。

※『戦争裁判』は熊日情報文化センター制作、九五二円。